

長野保健医療大学紀要への期待

副学長・看護学部長
井部俊子

「長野保健医療大学紀要」は平成 27（2015）年に開学した長野保健医療大学とともに第 1 巻を刊行し、2020 年度は第 6 巻となった。発刊にあたり、岩谷力学長は「大学の知を結集し、文化的風土を固め、これからの社会に、文化に貢献していく重要な媒体として紀要を育てていきたい。」と巻頭言で述べている。平成 31（2019）年に看護学部が開設されて本学は 2 学部となった。

「編集・投稿要領」第 2 条に紀要を発行する目的が示される。それは、(1) 医学、理学療法学、作業療法学、看護学、その他医療・保健分野を中心に、広く学術の発展に寄与すること、(2) 長野保健医療大学に属する教員および長野保健医療大学の卒業生に研究発表の場を提供するとともに、研究・教育活動に関する情報発信を行うこと、(3) 地域における共同研究活動を促進することである。投稿論文には「本学のあるいは他大学の研究機関が設置する倫理委員会の承認を得て適切に行われていることを示さなくてはならない」（第 7 条）とされ、「投稿原稿の採否は、（紀要）委員会が依頼した査読者が行った査読結果を基に、委員会で決定」される。

手元にある長野保健医療大学紀要第 1 巻から第 4 巻には、「原著論文」8 編、「研究・調査報告」が 5 編、「症例・実践報告」が 1 編、「総説」が 1 編、そして「教育・実習等に関する研究・調査・報告」が 2 編（1 編の短報を含む）収載されている。「講演録、業績書、特集」はなかった（掲載原稿の分類は、編集・投稿要領第 4 条に従った）。各巻の「附録」として「教員業績集」があり、論文、学術発表、特集・総説等、著作、講演等、社会活動といった分類のもとに標題が公開される。紀要第 6 巻は、原著論文 1 編、短報 1 編、総説 2 編が収載される。第 1 巻から毎回原著論文を投稿している教員がいる。伊原功教授（共通教養センター）である。

瀧川（2002）は、紀要を手に取り、目次を眺めるだけでも、本学にどのような研究者が属しているか、どのような学問が培われているかを知ることができ、紀要が学会誌と大きく異なる点であると指摘する。さらに、紀要は二つの側面をもっていると説明される。ひとつは、組織所属研究者の研究論文集であり、もうひとつは、その組織の広報誌の役割である。これまでの紀要は学会誌的性格だけが強調されてきたため、紀要は学会誌に準じたものでしかないと評価されてきた。しかし、一組織の独自の予算を使って刊行する紀要には、学会誌と違って非常に大きな自由度がある。それは学問的公共性から離れる自由度ではなく、その組織研究者の学会誌的客観性から離れる自由度ではないかという指摘である。つまり紀要は大学の顔として媒体を自由に演出していく態度があるとよいというのである。

では、長野保健医療大学紀要は、どのような自由度を持つべきであろうか。

私は、投稿論文の種別を整理し定義づけをして投稿しやすくするとともに、紀要委員会からの依頼原稿があっても良いと思う。本学が追究していこうとしている IPE（Interprofessional Education）構築のプロセス、コロナ禍での教育、学生の主張、地域共生社会の実像など時代性を反映した内容を収載し、後世に残すドキュメントとしたい。年度末に全学合同で開催される業績発表会も論文にしておくべきである。

うす緑色の小さな冊子である本学の紀要がすつくと立つ日がくるのはそう遠くないであろう。